

君様を犬千代様御えんへん相極り、明年九月江戸より姫君様金澤へ御輿入、御迎へに肥前様手取川まで御越候。姫君様御供大久保さがみ殿・青山ひだち殿・鶴殿兵庫・青山善左衛門、其外少身衆多。越前金津上野にて御輿を取渡しの時、前田對馬守御輿を請取被申。とあり。三州志變縁餘考にも、慶長六年辛丑九月晦日、台徳大君の翁主東海道を歴て金城に來嫁す。大久保相模守忠隣・青山常陸介忠成是を奉送す。安藤對馬守重信・伊丹播磨守康勝・鶴殿兵庫助暨び醫官久志木左馬助扈從し來る。我が卿大夫前田長種・長連龍、越前金津の上野に迎ふ。忠隣玉輿を長種に遞し、忠成貝桶を連龍に遞す。越前より奥村永福・村井長頼・横山長知・神尾之直等護輿金澤に到る。我が世子自ら城外へ出迎へあり。とあり。寛永系圖傳に云ふ。慶長六年九月晦日、台徳院殿姫君御輿入加州。爲利常室家。とあり。さて右新殿は、三州志來因概覽附録に、慶長六年天徳夫人入輿により、本丸に新殿を建て、夫人之に居給ふ。此の殿を新宅と稱す。當昔質素の風俗推思すべし。然るに翌七年の火災に新殿炎焼、元和六年の災にも又炎焼す。其の時に夫人は新丸の輿津内記

第一轉座あり。又云ふ。長連龍第も本丸にあり。有澤武貞享保甲寅筆記に、長如庵第本丸にあり。新宅出來の時、其地狭しとて、如庵へ今の第の家作を命ぜらる。とあり。平次按ずるに、右は誤なり。武貞の金澤圖譜に、寛永八年に二、丸に新宅出來の時、長如庵今の屋敷の家作ありと見わたるを見誤りたるもの也。

○本丸便殿災異

能登國羽咋郡金龍山大福寺所藏、藩祖利家卿親簡敷通の中に、左の一紙あり。

上書

きたの坊 御中 前又左利家

又わざと計に代貳十疋進之候。其方に入不申候はゞ、たれぐにも御とらせ候べく候。

わざと申入候。仍一昨日十日尾山のひろまへかみなり落申候。其そばに孫四郎居候て、少ひゞきにあたり候へども、なに事なく候。此中御きたうのしるしとかしこまり入候。いよ／＼御きねんたのみ入申候。恐々謹言。

六月十五日

利家判

右年曆未詳。按ずるに天正十一年四月尾山に入城し給ひ、同十三年九月十一日秀吉公の親書に、我等名めうじとも参らせ候間、向後前田又左衛門をかはり、羽柴筑前守と御名乗あるべく候。尤孫四郎儀も羽柴と可被申候。と戦せ給へれば、右の親簡は十一、二三年の間なるへし。孫四郎とあるは世子利長卿也。大福寺由來書に、中興開山者北之坊、實名不詳。元龜三年堂社草庵取立罷在。高德公度々祈禱被仰付、御書被成下云々。一書に云ふ。天正の頃北の坊といふ聖、僅の居をためて住す。此聖唯人にあらず。其比人皆天狗と云ふもの歎と沙汰しけり。利家卿被聞召、祈禱の事偏に頼思召、奇なる事ども夥多ありけり。越中平均に御手に入るも、且は北の坊祈禱の靈驗と感し思召され、彌御信仰淺からざる餘り、御直判の御書敷通被下しが、北の坊の跡絶えて、檀那の筋目なるを以て、富來七所の名主淨誓・同人子彌六方に預り置く。といへり。其の巨細は寛永十一年富來彌六の書付に載す。又三壺記に云ふ。慶長十年十一月晦日、宇賀祭の宵雷電影敷ひゞき渡り、金澤御城天守に落ちかゝり焼上る。折しも風強くして薄雪也。大森所に火

の粉かゝり、御本丸・御新宅まで一字も残らず焼失せり。南の堤臨に三拾三間の的場あり。其の外に櫻の馬場あり。其の外は侍町・堂形へつゞきて、城下に高島平右衛門・同甲斐守父子の屋形あり。天守焼上るとひとしく、石垣の上より利長卿大音あげて、平右衛門平右衛門と御呼び被成しかば、平右衛門奉りて、答へ奉る言葉と共に懸出し、御城中へ懸入り、上下のきらひなく引廻し、御前様及び女中を引きつれ、輿津内記屋敷へ入れ奉り、其の外の女中は中川宗半の屋敷へ入れ、二・三の丸並に新丸の本身共へ御父子共銘々に入らせ給ひけり云々。按ずるに、右火災は村井長明の象賢紀略及び聞見雜録に所記載を見れば、慶長七年十月晦日夜也。寛永系圖傳にも、慶長七年十月晦日夜亥時。雷震加州金澤城。天守回祿。と載せられたり。三州志變縁餘考に、七年十一月晦と載せたるも非なり。さて三壺記に其の年冬内に作事方命ぜられ、翌春追付御屋形出來すと見え、又元和六年十二月廿四日の夜、御城中奥方の御次の間、置圍爐裏の底に火残りて、縁の下へ火廻り、ねだ敷板に燃え付き、壘を通して障子に付きけれども、寝入懸り